

2023年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

時代が移り変わり、価値観が変化する中で、依存症という病気のとらえ方もまた大きく変わりつつあります。依存症という呼び方すら変わる可能性があります。実際、アメリカの医学界は、すでに薬物依存については「依存」という言葉を使うのをやめ、「物質使用障害」と呼ぶようになりました。

依存という言葉は、「依存性のある薬物をくり返し摂取すると、馴れが生じ、同じ効果を得るために必要な量がどんどん増えていく。そして、急にやめると離脱症状（注）リバウンドのような症状）が出る」という現象を指しています。ただし、これは、動物実験でわかったことにすぎません。これだけでは説明のつかないことがあるのです。

例えば、がんの激しい痛みを和らげるために医療用麻薬を使うことがあります。けれども、その患者が依存症になり、病院から麻薬を盗んだ、もしくは売人から不法に入手したなどという話は聞いたことがあります。医療用麻薬は、症状によってかなりの量のある程度の期間使いつづけます。だから、馴れも生じるし、量も増えていきます。それでも、医療用麻薬を使っている患者を依存症とは呼びません。アトピー性皮膚炎などの治療に使われるステロイドという薬もまた、使い続けるうちに馴れが生じるものの一つです。内服薬として継続的に使っていた場合、急にやめることは難しく、ゆつくりと少しずつ量を減らしていかなければなりません。しかし、だからといってこの薬を使っている患者が依存症として扱われることはありません。第3章に書いたように、依存症のしくみは脳のメカニズムにあります。それはそれで、理解しておくべき事実です。しかし、複雑な社会の中で生きる僕たち人間は、それだけですべてを説明しきれるほど単純なものでしょうか。①僕は、そうは思いません。脳のしくみを説明するだけでは、依存症という病気の核心にはたどり着けません。歪んだ人間関係の中で心に痛みを抱え、それを放置したまま薬物あるいは特定の行為で一時しのぎをつづけ、いつしかコントロールできなくなつて生活が破綻してしまう。これが依存症の全貌です。つまり、依存症という病気は、僕たちがどんな人間関係を築き、どんな社会をつくっていくのかということと直結しているのです。

【A】僕は、依存症がこの世からなくなることはないだろうと考えています。絶望的になつていているわけではない、人間は、どんな時代も、何かしらよりかかるものを必要としているような気がするのです。

【B】面倒な単純作業をしなければならぬとき、昔聞いた歌をいつのまにか頭の中でぐるぐるとループしていること、ありませんか？ それから、授業がどうにもつまらないときに、ノートを取っているふりをしながらラクガキしたり、わけもなく図形を塗りつぶしたり。多くの人は身に覚えがあるでしょう。人間は、ストレスを感じる状況に置かれたとき、それをやりすごすために気をまぎらわせようとするものなのです。そして、僕たちの祖先は、そうやって気をまぎらわせるのにうつつ

けのものをを見つけました。アルコールやカフェインをはじめとする薬物です。やがて社会が複雑化したとき、それを乱用する人が出てきてしまったわけですが、何かで気をまぎらわせるという行為は、僕たち人間の知恵でもあります。

【C】現代では依存性物質とされているタバコは、かつて儀式や治療に使われるものでした。大勢の人が日常的に楽しんでいるアルコールが、違法だった時代もあります。大麻が違法とされる国もあれば、合法とされる国もある。ゲーム依存は問題になるのに、どれだけ本を読んでも問題にならないのはなぜでしょう？ その時代、大人たちが気にくわれないものを依存と称して突き放しているような気がします。1日10時間以上勉強して、勉強以外のことがおろそかになったとしても「勉強依存」とはいいませんしね。1980年代、あれほど多かったシンナー依存は、不良文化の衰退とともに激減しました。インターネットができればインターネット依存が生まれ、スマホが浸透すればスマホ依存が問題になります。

【D】結局、「〇〇依存」と名前をつけて問題になるものの総量は、どんな社会でも、どんな時代でも、それほど変わらないのかもしれませんが。ある依存症がなくなったところで、別の依存症が生まれるだけ。だとしたら、何に依存しているかというよりも、根本にある生きづらさのほうに目を向けて、それを生み出す社会のあり方を疑問視するべきです。

【E】違法薬物を使うことを「被害者なき犯罪」と表現することがあります。では、依存症によって傷つく人はいないのでしょうか？ そんなことはありません。十中八九、家族は大変な思いをするでしょう。中高生なら、先生や友達に迷惑をかけるかもしれません。働いている人なら仕事に影響が出て、周囲の人を困らせたりもするでしょう。しかしながら、一番傷ついているのは、おそらく依存症になった本人ではないでしょうか。もともと歪んだ人間関係の中で悩みや苦しみ、心の痛みを抱えていたのです。そのうえ依存症によって健康を害し、生活が壊れ、場合によっては差別すらされてしまうのですから。違法薬物の場合は、とりわけ厳しい差別や偏見にさらされます。人とつながることができなくて、孤立しているから依存症になったのに、依存症になったことでますます孤立を深め、回復から遠ざかっていくのです。

② こうした負の連鎖を少しでも減らしていくためには、根本的な問題に向き合わなければなりません。虐待やいじめをなくしていくことはもとより、暴力や支配の背景には、貧困や失業、過激な受験戦争や少子化などがあります。貧困家庭を支援したり、経済格差を正したり、社会のしくみから見直すべきなのだろうと思います。

そうやってできるだけの工夫を重ねたうえで、気をまぎらわせるツール、すなわち薬物やゲームやギャンブルといったものを撲滅するのではなく、うまくつきあっていく。そうできたらいいなと思います。もちろん、度を越して使ってしまう人はゼロにはならないでしょう。どんなによりよい社会になろうとも、それは難しい。であれば、そういう人が出てくることをあらかじめ想定したうえで、社会をつくっておけばいいのです。切り離し、辱め、排除するのか。それとも心の痛みに寄り添い、

回復を支援し、もう一度迎え入れるのか。僕は、後者のような社会でなければ、依存症になった人に限らず、みんなが幸せになれないように思います。

アメリカでは、アルコール依存症や薬物依存症から回復して社会に復帰した人たちは、人々から(注3)リスペクトされます。有名な俳優やミュージシャンたちが依存症からの回復を公表し、(注4)自助グループにも積極的に参加しています。そのことが、依存症への誤解や差別を減らし、また回復の途中にある人を勇気づけています。

僕は、日本でも、依存症から立ち直った人が一般の人に触れ合う機会がもつとあったらいいのにと考えています。みなさんにも、ぜひそういう人に会ってもらいたいです。学校で行われている薬物乱用防止教育では、「ダメ。ゼッタイ。」というキャッチコピーのもと、一度でも薬物に手を染めたら人生が台なしになるかのように伝えられています。しかし、事実は違います。こうしたやり方は、依存症とは縁のない子に差別や偏見の種を植えます。一方で、自分は依存症ではないかと不安になっている子、すでに依存症になっている子を深く傷つけます。

依存症には、ならないほうがいい。その理由は、この本の中でくり返し伝えてきたつもりです。ただ、依存症になったからといって、人生おしまいではありません。人は失敗することがある。だけど、そこから立ち直ることもできる。(注3)そういう希望を持てる社会のほうが、ずっといいと思いませんか？

(松本俊彦『世界一やさしい依存症入門』)

(注1) リバウンド

投薬を突然やめたとき、急激に症状が悪化すること。

(注2) シンナー

前の章で筆者は「シンナーとは有機溶剤(塗装や洗浄などに使われる有機化合物)の一種で、脳の働きを抑制する薬物です。当時の不良たちはこれをビニール袋に入れ、気化したものを吸っていました」と説明している。

(注3) リスペクト

尊敬。

(注4) 自助グループ

同じ問題をかかえる人たちが集まり、相互理解や支援をし合うグループ。

問一 傍線部①「僕は、そうは思いません」とありますが、それはどういうことですか。解答欄に合うように四十五字以内で答えなさい。

問二 本文には、次の【 】の文章が抜けています。【 】の文章が入るところとして最も適当なものを、文中の空欄【 A 】～【 E 】から選び、記号で答えなさい。

【考えてもみてください。依存症として問題視されているものとされていないものの線引きって、どこにあるのでしょうか。】

問三 傍線部②「こうした負の連鎖」とありますが、それはどのようなことですか。

問四 傍線部③「そういう希望を持てる社会」とありますが、筆者はどのような社会をつくるのがよいと考えていますか。

問五 本文の内容と一致するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一般の人と依存症から回復した人とがかかわりあう機会を増やすことが、日本では積極的に行われている。
イ がんなどの激しい痛みを和らげるために医療用麻薬を使い続ける患者も、依存症として扱うことができる。
ウ 昔は問題視されず、治療に使われていた物質が、現在は依存性の高い物質として問題視されることがある。
エ 違法薬物を使い依存症になることで一番傷ついているのは、それを使用した本人ではなくその家族である。
オ ストレスのかかる状況をやりすごし、気をまぎらわせるためのものを初めて発見したのは、現代人である。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

「あんたのクラスに転校生が来たって？」

サランが注①ナルの教室の前で待つていた。

「そう、となりの席だよ」

ナルがぶつきらぼうな返事をした。

「ほんと？ みんなカッコいいっていつてたけど、どこどこ？ どんな顔か見てみたい」

サランが後ろの戸口から教室をきよきよと見回した。ナルはサランのリュックを引っぱった。

「カッコいいってだれが？ 早く部室に行こうよ」

ナルは廊下を走りながら、頭の中でテヤンのことを思い浮かべた。カッコいいといわれているらしい顔は浮かばなかったが、長い腕ははつきり覚えている。体育会系で何よりも重要なのは顔ではなく体だ。

ナルとサランが部室に入ると、コーチと部員たちがふたりを待つていた。後輩たちの顔を見て、すでにaおじけづいているのがわかった。しかたない。今日は大会の反省会がある日だから。反省会は、試合の映像を見ながら、これからもっと力を入れるべきことについて考える集まりで、大会に引けを取らないくらい大切な時間だった。でも、それはコーチの考えであって、部員たちにとっては、けっきょく怒られる時間（おこ）にすぎなかった。大会の経験が多い六年生だって、反省会の日は部室に来たくないのに、初めて全国大会に参加した後輩ならなおさらだろう。

楽しくない反省会だったが、ナルは内心期待しているところがあつた。あのキラキラのかがやき。きのうの試合映像を見れば、コーチだって注②キム・チョヒの水着がやさしいということに気づくはずだった。

あれは規定の水着じゃないだろう。水泳連盟に連絡してメダルを取り消さないと。

そこまではしないにしても、コーチならただじゃおかenないはずだった。ナルはそう思うだけでもこれまでの屈辱感（くじよくかん）が吹き飛ばような気がした。

「わかったか？ いまの話を忘れないで、練習のときに生かすようにしよう。それじゃ、最後の映像を見ようか」

ナルの番が来た。コーチがナルの試合映像を画面にうつした。ナルは胸をドキドキさせながらだまってコーチの表情をうかがった。でも、コーチは最後までちつとも表情を変えずに、落着いて画面をじつと見ていた。

「もう一回ゆっくり見てみようか」

コーチは映像をスローで再生した。画面の中のキム・チョヒは、ナルより1メートルも後ろにいる。だが、少しずつピッチを

あげると、やがてナルをぬいた。自分を追い越していくキム・チョヒの姿がありありと目に浮かぶようだった。いま思っても、手から力がぬけて、こぶしが握れないほどだ。コーチが一時停止ボタンを押した。

「ナル、ここから急に体勢（ていせい）がくずれるな。どうした？ ローリングがぜんぜんできてない」

静止画面にうつっている自分のポーズが笑えた。手足の動きがバラバラで、助けてくれと、もがいているようだった。

「テンポを失いました」

「なんで？ キム・チョヒにぬかれたから？」

ナルは何度も経験していることなのに、いざコーチからそういわれると、プライドが傷ついた。

「それならもつとキックを強くするなりなんなりして、前に出ようとしなないと。こうやってくじけちゃだめだよ。水泳はメンタルの勝負なんだから」

ナルも知っていた。競泳はどの種目より集中力が必要だと。自分には、息びつたりのチームメートもいなければ、体の弱点をおぎなう特別な技術なんてものもない。信じられるのは、もつばら自分と水だけ。でも、ときには、水さえ自分の味方ではない。選手になつてから痛いほど思い知ったことなのに、体が思うように動かないと、どうしても孤独（こどく）な気持ち（きもち）がしてしまう。試合が始まったら、自分しか信じられないのに、そんな自分とたえず闘（たたか）わなければならない。

ナルはコーチからそうアドバイスされると、悲しさを通り越してくやくしくなった。いまコーチがちゃんと見なければいけないのは、ナルではなくキム・チョヒなのに。わかっているくせにわからないふりをしているのか、本当にわからないのか、ナルはどうしても確かめたかった。

「①メンタルの強さだけで勝てないときだってありますよね」

「なんの話だ」

コーチがきいた。こうなつた以上、話をやめるわけにはいかなかった。ナルはついに自分から切り出した。

「相手が反則をおかしたとしたら？」

「反則？ きのうだれか失格（DQ）したっけ？」

ずっとよそ見していたセチャンが、反則の話に興味（きょうみ）がわいたのか、割りこんできた。

「先生はへんだと思いませんか？ キム・チョヒって、もともとそんなに速い子でもなかったのに。あの子って絶対何かあるはずです。水着だってあの子だけ目立っているじゃないですか。あれってほんとに競技用（しぎよう）ですか？」

ナルは、キム・チョヒがやさしいということを説明（しやうめい）するこの瞬間（しゆんかん）でさえ、キム・チョヒが速いという事実（じじつ）をみとめなければいけないのがイヤだった。

「キム・チョヒの水着がどうしたの？」

部員たちが画面に近づいて、キム・チョヒの水着をじろじろと見つめた。でも、コーチは画面ではなくナルにじつと目を向けていた。

「ほんとだ。あの子の水着だけめっちゃキラキラしてる」

サランがとなりでナルの肩を持った。

「そんなバカな」

だまつていた^(注3)スナムがいった。

「身につけたら超能力が出るスパイダーマンのスーツじゃあるまいし。水着のせいで負けたなんて、話に無理があるだろ？」

スナムの声から^②がっかりしたような立ちが伝わってきた。セチャンとドンヒはスパイダーマンの話に反応して、おたがい手首からクモの糸を放ち合うふりを始めた。そのようすを見ていた後輩たちも、ふたりの悪ふざけにクスクスと笑い始めた。けっきょくサランが、空気の読めないじゃまものを外に連れ出した。ナルはこの絶体絶命のピンチにも、自分の味方になつてくれないスナムがにくらしかった。

「全身水着を着たらタイムがちまるって話、知らないの？ あやしい薬を飲んだのが、あとからバレることだってあるし。あの子だって何かあるかもしれないといってるだけなのに何よ！」

スナムも引きさがらなかった。

「ナルがいったとおり、あれが特殊な水着だしよう。じゃあ、あれを着たら、タイムがどれくらいちまるの？」

「どれくらいちまるかの問題じゃないでしょ？ 決勝ではちよつとのちがいが致命的なの！ あんたにはそれがわからないだろうけど」

スナムの眉がピクツとした。

「カン・ナル、ちよつと言葉がひどくないか？」

「ふたりともそこまでしなさい」

見かねたコーチがふたりのケンカを止めた。ふたりは顔をそらした。

「あれが問題のある水着だったら、キム・チョヒは試合に出られなかったはずだ」

ナルはまだ何かをいいはりたいと思つたが、何もいうことが見つからなかった。

「ナルは、少し気持ちを整理したほうがよさそうだね」

ナルの心は、整理どころかぼつきり折れてしまった。ナルとスナムは六歳^(韓国は生まれたときを一歳とする数え年)のときにYMCAの子どもスポーツ団で初めて会つた。ふたりとも鼻から水が入ってコホンコホンとせきこんだ瞬間から、ひとりは漢江^{ハンガ}小水泳部のエースになり、もうひとりとは部長になつたまま、ふたりの水泳歴はそっくりそのまま重なっている。

水の中でも外でも、うれしいときもつらいときも、ナルのとなりにはスナムがいた。そんなスナムが、初めてナルに背を向けた。ナルはさびしさのあまり、自分がスナムをどれほど傷つけたかについては考えられなかった。ナルが切実に優勝を願うように、スナムだつて自分の決勝進出を心から望んでいる。そんなことを知らないはずはなかった。これだけはスナムも怒りがおさまらないのか、ナルからうんと離れたまま立っていた。八年の友情に危機がおとずれた。

ふたりのあいだに冷たい風が吹きこみ、水泳部の空気も冷えてしまった。そのおかげでというべきか、練習ではだれひとりふざけることなく、すつかりまじめな雰囲気で行われた。

テヤンが部室にやつてきたのは、それから二日後のことだった。

「こんにちは」

水泳部の全員が、ちよつど部室に集まつていた。テヤンはナルと目が合うと、こっそり手をふつた。ナルとテヤンを交互に見る部員たち。ナルは「何も知らない」と伝えるために肩をすくめてみせた。スナムがテヤンを上から下までじろじろながめた。自分より背が高いのに、ほっそりした体つき。顔は……スナムはそれとなく鏡のかわりにスマホの画面に自分をうつして髪をいじつた。

「あつ、二組の転校生、チョン・テヤンでしょ？」

サランが声をかけると、ぎこちなく立っていたテヤンがうなずいた。

「そうなのか。なんの用事？ だれかのお使いか？」

コーチがぎいた。テヤンはコーチの前に行つて、あらためて深ぶかと頭をさげた。

「こんにちは。六年二組のチョン・テヤンです。水泳部に入りたいです」

とつぜんの申し入れに、部員たちがおどろいた。水泳部には、ふつう放課後の水泳教室でずばぬけた実力の子がすいせんで入るか、両親とコーチの話し合いで低学年のときから入るか、がほとんどだった。テヤンのようにも無鉄砲に押し入ってきて、入部を申し入れるケースは、見たことがない。でも、思いのほかコーチはうれしそうにテヤンを迎えた。

「そうか。チョン・テヤン、よく来たな。スナム、みんなをジムに連れていって運動を始めて」

コーチがスナムにトレーニング日誌を手わたした。部員たちはそのまま部室に残つて、どんな話をするのかききたかったが、

コーチの目つきに押されてだまって外へ出ていった。

「何？ アイツ、水泳やってるの？」

サランがびっくりした声でいった。びっくりしたのはナルも同じだけれど、おどろいたそぶりは見せなかった。

「選手登録してる子なら、コーチは転校してくる前から知ってたはずだろ」

スンナムのいうとおりだ。大会の成績がぜんぜんよくなかったとしても、選手ならコーチが知らないはずはない。全国の小学校の競泳選手が千五百人以上いたとしても、コーチどうしはみんな知り合い同然なのだ。

「じゃあ、いまからやるつもりなのかな」

「え？ 六年生なのに、いまさら？」

部員たちは、ありえない話だと口をそろえていったが、内心、新しい仲間ができるかもしれないという期待で、なんとなくウキウキしていた。

「シッ、静かに」

セチャンはさつきからドアに耳を当てて、テヤンとコーチの会話にきき耳を立てている。何もきこえないだろうに、ドアに耳を当てているだけで何かつかんだような気がするのか、目がキラキラとかがやいている。

「もう運動しに行こうよ」

スンナムが真ん中に立つて、その両側から部員たちが向き合うように輪になった。一、二、三、四と号令に合わせて準備運動を始めた。

ナルは、テヤンが本当に水泳部の部室をおとずれるとは、思ってもいなかった。数日前に、テヤンから入部したいときいたときは、「水泳部を甘く見るな^{あま}！」といったいのをぐつとこらえた。授業中だからがまんできたわけで、休み時間だったらきつとがめ立てただろう。ナルは、泳ぎにちよつと自信があるという男子から舞いこんでくる挑戦^{もっとうせんじよう}状に、うんざりしていた。テヤンがどういう考えで来たのかは知らないが、どうせコーチが受け入れるはずはない。ナルはコーチが水泳にかんしては甘くないということを、だれよりもよく知っていた。

ナルがキム・チョヒの水着を疑ったことだって、コーチはあっさりと解決してくれた。国際水泳連盟に承認^{しょうにん}されている水着モデルのリストから、キム・チョヒの水着を見つけてくれたのだ。有名メーカーの新商品でキラキラがついているだけの、変わったところのない水着だった。

「すみません」

じつは、ナルも知っていた。水着の問題じゃないと。キム・チョヒは、ナルより速いだけなのだ。でも、それをみとめてしまうと、このまま負け続けてしまいそうで怖^{こわ}かった。どんないいわけをしても、この状況^{じようきよう}から逃げ出したかった。でも、コーチがわざわざそこまでして、ナルの目の前で確認^{かくにん}をしたのは、これ以上逃げてはいけないという警告なのかもしれない。

「きのうお母さんから電話があつたよ。かなり心配されているようだった」
ナルはここ数日間、見苦しいところばかり見せていた自分が、はずかしくなった。お母さんにも、スンナムにも、③申し訳ないと思う気持ちが満ち潮のように押しよせてきた。

「ナル、わたしは勝ち負けだけが水泳じゃないと思うんだ」

「でも、試合は勝つためにやるものじゃないですか。アタシ、勝ちたいんです」

コーチが軽いため息をついた。

「ナルのいうとおりだ。でも試合で一生勝ち続ける選手なんてひとりもない。だれにだって負けるときがあるんだよ。もしかしたらどう負けるかが、どう勝つかより大切かもしれない」

コーチは、ナルには理解できないことをいうときがある。このあいだは気持ちを整理しろといって、今日は負けるのが勝つよりも大切だといっている。ナルが知るかぎり、そんな試合はない。

④よくわかりません」

「どうして水泳をやっているのか、一度自分でちゃんと考えてみるといいよ」

ナルは試合がなくても、月曜日から金曜日まで毎朝一時間、ひとりで練習をする。それから授業が終わると、水泳部で二時間、今日みたいに陸上トレーニングか水中トレーニングをする。特訓期間中には、週末も休まない。ナルは好きでしているけれど、いつも楽しいわけではない。なのに毎日早起きするのも、真冬にがまんしてプールに行くのも、心臓がバクバクしているうちにまたスタートするのも、腕と足がズキズキ痛くてもなわとびを決まった回数までとぶのも、けつきよく試合で勝つためではなかったか。ナルは水泳で勝つこと以外に、どんな意味があるのかがわからなかった。ただ楽しむだけなら、こんなに苦しまなくていいはずだ。

(ウン・ソホル作 すんみ訳 『5番レーン』)

(注1) ナル

漢江^{ハンガン}小学校に通う六年生。水泳部の女子部員であり、チームのエース。サラン、セチャン、スンナム、ドンヒも同じ水泳部に所属している。

(注2) キム・チョヒ

ナルとは別の小学校に通う六年生。水泳部の女子部員であり、ナルのライバル。

(注3) スンナム

漢江小学校に通う六年生。水泳部の部長をつとめる男子部員。

問一 傍線部 a 「おじけづいている」、b 「無鉄砲に」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------------|---------------------------------|--------------------------------|-------------|
| a 「おじけづいている」 | ア 落ちこんでいる | イ 緊張 <small>きんちやう</small> している | ウ あきらめている |
| | エ こわくなっている | オ 覚悟 <small>かくご</small> を決めている | |
| b 「無鉄砲に」 | ア 礼儀 <small>れいぎ</small> もわきまえずに | イ あとさを考えずに | ウ 自信に満ちあふれて |
| | エ かざり気のない態度で | オ 自分の都合を優先して | |

問二 傍線部 ① 「メンタルの強さだけで勝てないときだつてありますよね」とありますが、このような言い方でナルが本当に主張したいことは何ですか。

問三 傍線部 ② 「がっかりしたような立ち」とありますが、スナムはナルのどのような態度に対して「がっかりしたような立ち」を感じたのですか。

問四 傍線部 ③ 「申し訳ないと思う気持ち」とありますが、ナルがスナムに対して申し訳ないと思うのはどうしてですか。六十字以内で答えなさい。

問五 傍線部 ④ 「よくわかりません」とありますが、コーチの言葉を理解することができないのは、ナルがどのような考えを抱いだいているからですか。解答欄に合うように十五字以内で答えなさい。

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | |
|----------------------------------|---------------|-----------------|
| 1 カンソな生活をおくる。 | 2 アツカンの演技。 | 3 今後の方針をキョウギする。 |
| 4 年功ジヨレツ。 | 5 月の表面をタンサする。 | 6 イニン状を渡す。 |
| 7 キュウトウ器 <small>こわ</small> が壊れる。 | 8 しずくがタれる。 | 9 日がクれる。 |
| 10 キヌの名産地。 | | |

受験番号

氏名

評 点

【—】

問

と筆者は思っていないということ。

問

11

問二

問四

問五

1

【二】

問

a
b

問一

Downloaded from <http://ajph.org/> on November 10, 2014

問二

問四

[illegible]

問五

[illegible]

という考え。

【三】

6	1
7	2
8	3
れる	
9	4
れる	
10	5